

「共鳴～Kyo-mei」プロジェクト活動報告2 ～「触れて知る」を伝えるワークショップ～

"Kyo-mei" Project Activity Report 2 : Workshops to communicate 'touch and know'

森 真弓・深町 浩司・佐藤 文子
MORI Mayumi, FUKAMACHI Koji, SATO Fumiko

The "Kyo-mei" project starts from the basic method of percussion technique using Hyoshi, which states that "sound is produced when objects touch each other, and the tone changes depending on the way the objects touch each other," and encourages a new awareness of the various sounds that abound in our surroundings, and arouses interest in the background behind such sounds. The project aims to discover the value and meaning of various sounds in society. By seamlessly linking the daily activities of "touching things, making sounds, and recognizing and understanding objects," the project aims to make the percussion method transcend the realm of artistic expression and be widely shared and utilized as a concept for building a society that "resonates" with each other. The workshops offered by this project are designed to be "a place where people can learn and play percussion instruments".

The workshops offered by this project aim to help people understand the importance of "touch and know". Through these experiences, we believe that people will be able to think and understand the environment around them proactively through the phenomenon of "sound," which will in turn help them recognize the diverse values in society. This report describes the progress of the project, focusing on the three events and workshops that have been held so far.

はじめに

「共鳴～Kyo-mei」プロジェクトは、拍子木を用いた「モノとモノが触れることにより音が出て、その触れかたによって音色が変わる」という打楽器奏法の基本的なメソッドから出発し、身の回りに溢れる様々な音色に対する再認識を促し、その背後にある背景に興味を引き起こし、社会における多様な音の価値や意味を見つけ出すことを目指すプロジェクトである。日常の「モノに触れる一音を出す一対象を認知し理解する」といった活動をシームレスに結びつけることで、打楽器メソッドが芸術表現の領域を超え、「共鳴」し合う社会を築く概念として、広く共有され、活用されることを目指している。

本プロジェクトが提供するワークショップは、「触れて知る」ことの重要性を理解させることを目的としている。これらの体験を通じて、人々は「音」という現象から身の周りの環境に積極的に思考し理解するこ

とができ、その結果、社会における多様な価値を認識する一助となると考える。この報告では、これまでに実施した3つのイベントと共に行ったワークショップを中心に、プロジェクトの進捗状況を記す。

1. 愛知県立芸術大学芸術講座「共鳴～Kyo-meい」

本学の豊かな自然環境を活かし、音に焦点を当てたフィールドワーク企画とした芸術講座を、2022年9月11日に開催した。

このイベントでは、参加者が音をどのように認識しているのかを理解するために、拍子木を使用し、音が鳴るメカニズムに触れ、その「触れかた」による音色の変化を学んだ。その後構内を歩きながら、自身を取り巻く音の世界に触れ、それを身の回りの様々な状況に置き換えることで得られる「気づき」の意味を考えた。最後に、専門的な打楽器奏法によるオリジナルのオブジェのライブパフォーマンスを鑑賞し、音と音楽の境界、その中で聞こえるものの価値などについても参加者に考えてもらった。

1.1 概要

本講座の開催時期は、まだコロナ禍であったこともあり、定員を20名に設定したが、当日の飛び入り参加も含めて27名程度の参加があった(図1)。

◎第1部:「共鳴」を知ろう

最初のセクションでは、プロジェクト名でもある「共鳴」の意味と、それを掘り下げるための基本となる「音」そのものについて、参加者が理解を深め意識を共有できるようにするため、導入となるレクチャーを行った(図2)¹。

我々が社会生活の中で耳にしている音は、多くが人の行動によって必ず発生するものであることから、人の生活を示すものであると言える。音は、空気などの媒体が存在するところでは波として伝わるため、全ての場所に存在する。人は、耳を閉じることができないため、全ての音が聞こえてしまう状況にあるが、「聞きたい」「聞こう」という能動的意識から、それらの音が自分にとって必要かどうかを無意識のうちに判断し、優先順位を付けて聞こえの調整を行っている。

そして、発音する側が意図している/いないに関わらず、ある質を持った音が発生するが、それを受け止める側は、その音質から様々なイメージを想起する。つまり人は、単なる音量や質感などだけ



図1 芸術講座の様子

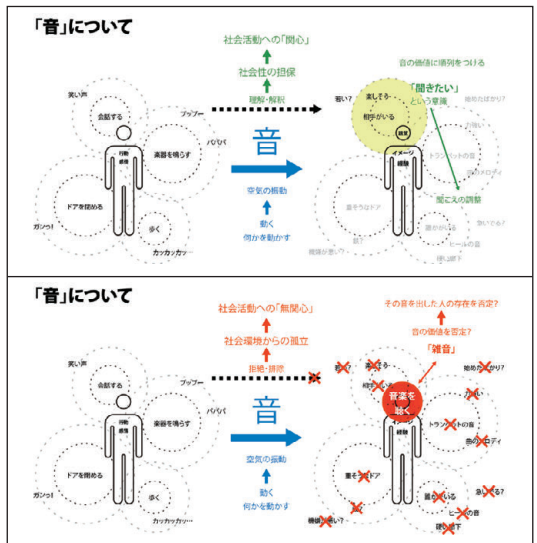


図2 音について

ではなく、発音した人の感情や状況などその背景まで想像している。これらのことから、人にとっての「いい音／わるい音」というものは、個人の価値基準から生み出されていること、そもそもその音自体には差異が存在しないことを理解させた²。

その上で、実際に拍子木を使って発音を体感させた。2つの木片を触れ合わせることで発音すること、音を発する時に身体の中で何が起きているかを、それぞれ確認した。

◎第2部：「共鳴」を見つけよう

次のセクションでは、実空間にある音に触れるために、学内の散策を行った(図3)。配布した拍子木を様々な空間で鳴らしながら歩き、空間が変わることによって音質や響きが変わることを体験し、また、いろいろな響きを探索した。さらに、それぞれの場所にある拍子木以外の素材を、拍子木を使って触れ、異素材同士が触れ合う時に発する音や、そこから得られる打感などを味わった。

◎第3部：「共鳴」を味わおう

散策終了後、最後のプログラムとして、音を味わうセクションを用意した。ここでは、「from Natural-wood to Percussion」を参加者にお披露目した。この作品は、本学内の各所で採取された、様々な樹種やサイズの木材の表皮を剥き並べたオブジェである。作品の制作意図として、できるだけ採取されたままの形を活かし、あえて恣意的な加工を行わないように、皮だけを剥いて仕上げたものである。この、ただの木々(特に機能や意味を持たないもの)が並んでいるオブジェに対して、打楽器奏法のメソッドを駆使してこれらを奏した後は、その価値が変わるのかどうかを試した。具体的には、これらの音を聞く前に、参加者に「これは楽器か否か？」と問いかけ考えてもらった上で、一般的に知られている様々なリズム表現による“演奏”を聴いてもらい、その後感想を確認した(図4)。



図3 学内散策の様子

1.2 結果及び考察

今回、参加者にはワークシートを配布し、以下の問いを投げかけた。

- 《1》あなたにとっての「いい音」とは？「わるい音」とは？どんな音でしょうか？できる限り具体的に書いてみましょう。
- 《2》散策の中で見つけた「共鳴」を思い出して、できる限り書いてみましょう。



図4 打楽器奏法によるライブパフォーマンス

- 《3》今回「触れたモノ」の中で、印象に残ったものはありましたか？またそれはなぜですか？
- 《4》ミニライブを聞いて、何か感じたことはありますか？
- 《5》打楽器について、認識が変わりましたか？変わったなら、どう変わりましたか？

ワークショップが始まってすぐに《1》について、散策が終わった後に《2》について、ワークショップ終了後に残りの3つの問いについて、回答を記入してもらった。散策開始直後は、参加者が拍子木を鳴らしたりものに触れたりするのに、少し躊躇する様子も見られたが、散策が進むにつれて、能動的にいろいろなものに触れて歩き回り、探している様子が伺えた。《2》と《3》の回答には、多様でユニークなオノマトペがたくさん見られ、また「木の下と空の開けた場所では音の力が違う。」「視覚の情報があると、聴覚+触覚に鈍感になる？目を閉じると敏感になる。」「ものの上下の、こもった音と開放的な音が共存している。」「表面が同じ素材でも中の様子で音が変わるのにおどろきました。」など、空間や体感に対して多くの気づきを得られたという内容が見られた。また、《4》と《5》の回答として、「普段意識していなかったことが、聞くことでなぜ音がでているのか、どこからなっているのかギモンをいだくことができた。」「最初どんな音が出るのかわからないのに、ちゃんと成り立っていて、可能性が無敵大だと思いました。」「たたき方、たたくもの、様々なものを少し変えるだけで、とても多くの音や響きが聞こえることに感動しました。」など、打楽器や音、音楽に対する固定概念が払拭でき、新たな視点を与えることができたのではないかと考える。そして、ワークショップ終了後には、参加者の殆どが「from Natural-wood to Percussion」を鳴らし、木々の音を楽しんでいたのが印象的であった(図5)。



図5 ワークショップ終了後、木々の音を味わう参加者

2. 平成こども塾×共鳴～Kyo-meiプロジェクト「土の音をきく」

本プロジェクトは、長久手市主催の「平成こども塾」において、本学美術学部陶磁専攻の大学院生が中心となって企画開催しているプログラムに、毎年参加している。企画の狙いとして「土に触れ感じる」というテーマが根底にあり、特に「土の音をきく」という側面に対して、ものが触れ合って音が鳴るという感覚とその意味を理解してもらうため、打楽器メソッドによる体感プログラムを展開した。

2.1 概要

本プログラムは、こどもを対象とした工芸教育と創作に有効な表現方法についての実践研究の試みである。これまでに長久手市の教育施設である「平成こども塾」の連催事業として、陶磁専攻陶芸コース佐藤文字研究室に所属する学生（主に大学院生）とともに、こども（小・中学生）を対象に夏休みの時期を利用した工芸講座を開催している。この講座では、制作プロセスにある「観察・発見・想像」が「自分で考える力」を育むことに着目し、こどもたちの感性を豊かにし、また陶芸にも興味を持って楽しく作品を制作してもらうことを目的としている。陶芸素材は、表現しようとする能力をよりよく育む有効な手段で、こどもたちの発想力や想像力を維持しやすく制作方法の豊かな素材であると考え。こどもたちが楽しみながら題材と出会い、素材や道具から偶然できるカタチや色彩の美しさや土の音色を体感しながら、自分が作りたいものに気付き、自分で作り、自ら達成感を得ることを知る講座を、企画・運営し、実践する研究活動である。

◎実践の背景

この実践は、大学院生が主体的に企画から運営、講座実施に至るまでのプログラムを思索する取り組みである。学生自身が日頃の制作活動の過程で身につけた表現方法を講座に取り入れ、制作工程とその効果を明確にするために試作と検討を重ねた。講座開催時には講師としてプログラムを動かし、小学生から中学生と異年齢が混在する場において、こども自身が、素材の観察から感じる事、発見すること、理解してできるようになること、他者の取り組みを感じてみる、といったさまざまな体験を受けて、自らが考えたことを解決するための援助を行った。

◎実践の内容

今回のプログラム実施日は、8月5日（金）と11月3日（祝）の2日間である。テーマは、「土とあそぶ～土を練る・土でつくる・土を焼く・土の音をきく～」とし、全身で土の素材を体感しながら、機能のある器物制作を目指した。

講師側は、手と足を動かして、土という素材を操作・成形することを通じて、身体と頭で思考しながら作陶する面白さをどのように伝えるかについて検討を重ねた。できるだけ教え込まないで、こども自身の自発性を引き出すことを今回のプログラムの目標とした。実践した様子から、こどもおよび学生の「自分で考える力」について考察し、工芸素材と創作に有効な表現方法と成り得たか否かを検証した。

I：土を練る

予め、成形し易い塊の硬さに整えた粘土（約100kg）を参加者全員で練った（図6）。

II：土でつくる

《A-大皿》手と足を使って大きな粘土の板をつくり、その陶板に全身を使って思い思いの文様をつけた。文様をつける素材は、身体を動かすことでできた文様はもちろんのこと、施設内の



図6 土を練る

散策により拾い集めた木片や石、木の実などによるマチエールを制作、その文様の中から自分の気に入った部分を切り取り30cm程の大皿を成形。成形方法は、布の四方を縛り(図7)、できた曲面を活かした方法により成形を行った。

《B-花器》Aの工程でできた陶板を用い、8cm程度の円筒に巻き付ける方法で成形を行った。

Ⅲ：土を焼く

《A-大皿》乾燥後、800℃の素焼焼成を行った。その後、作成した木灰釉を釉掛けした後、ガス窯により約1250℃の本焼成を行った。焼成後、土の音色を確かめる触振実験(図8)を行った。

《B-花器》乾燥後、稲藁ともみ殻を使って野焼き焼成を行った。施設の使用時間内で終了できるように時間を想定し、約4時間で炭化した状態の温度まで上昇させる焼成方法で行った。

Ⅳ：土の音をきく

いろいろな木のバチを使って、やきものの音色を体感した。自ら制作した作品(図9)とともに、粘土の厚さ・器物の形・土の焼締まり(焼成温度による違い)等による特徴を示す器物試料(図10)を触振した。



図7 皿の成形



図8 焼成後の触振実験



図9 作品を木のバチで触れて音をきく



図10 粘土の厚さ・形・土の焼締まり等による違いを体得する試料

2.2 結果及び考察

実践の様子からは、こどもたちが文字通り素材に体当たりで触れ合い、粘土から様々な情報を引き出し、身体感覚を通じてそれらを知り、心から楽しんでいるのが伺えた。その結果、普段の学校教育の授業では体験ができない、陶芸技法や道具との出会い、やきものの最大の特徴であり素材である粘土の可塑性から偶然できるカタチ、色彩の美しさや土の音色を体感しながら、自分が作りたいものに気付くことができたと考えられる。

特に今回は、音というアプローチを取り入れたことで、触れるもの、触れる方法、触れる対象の様子の違いによって音が変わること、その時に受け取る感覚が変わることを体感させた。自分自身の感覚

をより幅広く意識させることによって、多様な側面から「想像」に向き合うきっかけを与えられたと考える。こどもたちがこれらの創作を通じて、「観察」や「発見」すること、知りたいという好奇心、わかる喜びという気持ちを持ち、自分がいいと思うものを「想像」し、手段を選び表現しようとすることで「自分で考える力」を持つことが、自己肯定感を育む効果に繋がったと考える。

3. 日進市との連携プロジェクト

日進市の学び支援課(旧・生涯学習課)と連携し、2023年3月から4月にかけて同市市民会館にてプロジェクトを行った³。

3.1 概要

まず、異なる側面から拍子木に向き合う2つのプログラムを展開した。ひとつは「拍子木制作ワークショップ」、もうひとつは「子ども拍子木演奏プロジェクト」である。最後に両方の参加者が交流するプログラムによって、参加者に多角的にものを「感じる」ための気づきを与えることを目的とした(図11)⁴。

◎拍子木制作ワークショップ

愛知県の県産材であるヒノキの間伐材を素材として、参加者自らが“マイ拍子木”を作るワークショップを、日進市民会館工芸室にて4月29日に開催した。これは、自らの手で造形することで、素材である木と対話し、日常的にはあまりない視点から木に触れ、木から音を奏で、その特徴を肌感覚で捉えてもらうという試みである。参加者は17名で、9歳から70歳代までの幅広い年齢層が集まった。あらかじめ一定のサイズにカットしたヒノキの角棒を用意し、それを参加者が手作業で加工し、およそ5段階の工程を経て90分で完成できるように指導した(図12)。完成品は、1つの面に丸みがついた拍子木となる。今回用いたヒノキ材はどれも節や歪みがあり、それぞれが個性を持つ素材である。このため、拍子木の完成を目指すためには、参加者は自分が手にした木の個性を理解しながら作業を行

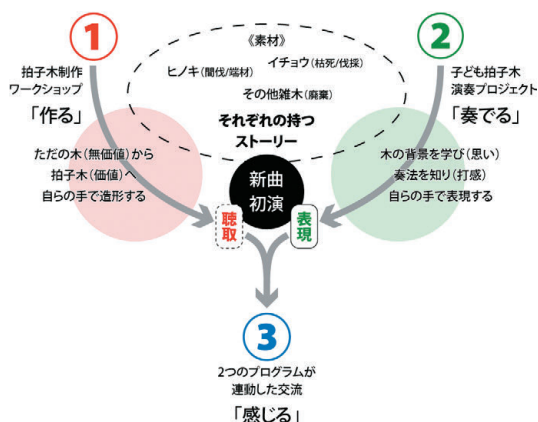


図11 プログラムの関係図



図12 木作業の様子(工芸室)



図13 奏法レクチャーの様子(工芸室)

う必要があった。このため、木をよく観察することと仕上がりをイメージすることを参加者に促した。

拍子木の完成後は、奏法のレクチャーを行い、参加者は各自が作った拍子木を自由に鳴らして、それぞれの音を聴き取った。(図13)。

◎子ども拍子木演奏プロジェクト

古来拍子木の音はメディア性を持ってきた。それは、かつて冬の夜の住宅街で鳴り響いた拍子木の音が、「火の元に注意せよ」という注意喚起の意味をもたらしていたことを考えれば明らかである。このプロジェクトは、拍子木のメディア性を活かしつつ多様な音色表現を盛り込んだ楽曲を子どもたちが演奏するものである。

楽曲は、「共鳴～Kyo-meい」が坂田直樹氏⁵に委嘱した拍子木合奏曲《こだまの輪～拍子木アンサンブルのための～ Kodama no wa for hyoshigi ensemble 2023》、楽曲で用いた拍子木は「共鳴～Kyo-meい」オリジナル仕様で、愛知県の多様な木を組み合わせたものを用意⁶(図14)した。プロジェクト参加者(演奏者)は日進市内在住・在学の中高生ら計8名であった。



図14 異種の木を組み合わせた8組の拍子木



図15 《こだまの輪》の初演(エントランスホール)

プロジェクト期間は3月下旬～4月下旬までの約1ヶ月間で、参加者は愛知の木について学ぶ座学1回を受講し、4回の拍子木奏法実習および楽曲リハーサルに参加した。4月29日に日進市民会館内エントランスホールにおいてコンサートが開催され、ワークショップ参加者と一般聴衆の前で《こだまの輪》が初演された(図15)。

◎拍子木を介した交流

《こだまの輪》初演終了後、ワークショップ受講者と演奏者と講師(森、深町)が市民会館ライトコートに集い、交流を行った。

まず、丸太や小枝など様々な種類の“愛知産の木”を用意し、各自が自分の拍子木を用いてそれらの木に触れて自由に音色表現する試みを行った。

次に全員(23名)が拍子木を左右の手に持って、ひとつの輪を作り、左手の拍子木は動かさずに構え、右手の拍子木で右隣の人の左手の拍子木に一定のパルスで触れる(自分の左隣の人の拍子木が、自分が構えた左手の拍子木に触れる)ことで、全員でパルスを精密に同期させるパフォーマンスを行った(図16)。その際、「音よりも触感に集中すること」「左手に感じたことをそのまま右隣の人に伝えること」を全員に促した。



図16 交流参加者23名によるパフォーマンス(ライトコート)

パフォーマンスの最中は、右隣の人の左手に持たれた拍子木に触れると自分の右手に触感を得るわけだが、同時に右隣の人は左手に触感を得ることになる。拍子木を握る強さや拍子木を動かすスピードなどの条件がわずかに変化するだけで、触感は変化する。これは、手に持つ拍子木が触れあうことで互いの身体の様子をセンシティブに感じ取っているという状況である。

3.2 結果及び考察

このプロジェクトでは、拍子木のメディア性と拍子木の音色の多様性によって、言語を介さない一音そのものを介した一自由な交流が行われ、モノを多角的に感じることへの気づきが生まれることを狙った。

ワークショップの参加者は自ら手作りした拍子木を打ち鳴らす体験を通じて、自分の拍子木の存在が唯一無二でありその音も唯一無二の存在であるということについて理解したとすることができる。コンサート聴衆へのアンケートでは、「拍子木だけで音楽が成立することが興味深い」という感想が多く見られたが、これは聴衆の「拍子木だけで音楽は成立しない」という既成概念を聴衆自身が崩したのだと考えることができる。また、「音に関して新しい捉え方をされていて興味深い」という感想があったが、これは聴衆自身が拍子木の音を新しい角度から捉えたから「興味が深くなった」のだと考えることができる。演奏者（子どもたち）へのアンケートでは、「木の違いで音が変わるなど様々な発見があり良い経験になった」「奏法を替えるだけで音色の感じ方が変化して面白いと思った」など、木の多様な音色そのものについての感想が多かった。また、「愛知の木の音色を感じてみて、木でも種類や質の違いでいろんな音色を表現出来て楽しかった」「愛知県で伐採される木を拍子木にして音で継承することにとっても温かみを感じた」など、愛知県産材を用いた表現活動について高く評価する記載があった。

これらの内容から、聴衆や参加者が木の音に素直に触れて感じ取っていた様子や、自分自身が感じたこと尊重している様子が分かった。また愛知産の木や自然環境に対する関心が高まったことも分かった。また、2つのプログラムを経た参加者が「聴衆」と「演奏者」というそれぞれの立場で木の音を介して交流し、それぞれが自由に「感じる」場が生まれたことも分かった。よって、プロジェクトの狙いは概ね達成できたと考えられる。

参加者全員による交流で行ったパフォーマンスは、パーカッション・アンサンブル⁷の即興演奏だと定義することができる。奏者全員が触感に集中することによりパルスが同期された状況は、「音楽」におけるまったく新しい一聴覚はもとより視覚も用いない、触覚のみによる一表現手法が成立する可能性を示唆しており、今後さらに研究を深めていく必要がある。

おわりに

人にとって音とは、「身の周りのモノとモノが触れることで聞こえるもの」と言え、状況を認知するため聴覚から得られる情報の一つである。そして、人が「触れて知る」ことは、ごく自然で無意識な行為であり、聴覚と触覚から得られる情報から、対象について最も繊細に認知することができる方法で

ある。一方で、科学的進化によりテクノロジーによる拡張社会が広がると、それによってもたらされる情報量は、人が処理できるものを遥かに超えてしまった。その状況下では、情報そのものが既に他者のフィルターで選別されている事実もある。こうした社会における情報に受動的になる状況は、本来人間が生きるために必要な感覚を衰えさせてしまう危険をはらんでいる。今こそ、身体性を伴った芸術活動を通じて、能動的に「触れて知る」ことの意味を体感的に伝えていく必要がある。これから間違いなく、人間本来の持つ「知る」能力を高めることが求められていくこの社会において、多様性を当然のものとして認められるようになること、そのきっかけとして様々な芸術表現が寄与できると考えている。

拍子木からスタートした「共鳴～Kyo-meい」プロジェクトは、今後もより多様なアプローチを模索し、「触れて知る」ことを掘り下げながら、その意味を伝え広める活動を継続していく。

註

- ¹ 説明図作成：森真弓
- ² ただし、人がある特定の音に対して共通に不快と感じる事実は存在する。しかし、その理由はまだ明らかになっていない。
<https://www.scienceabc.com/eyeopeners/why-do-certain-sounds-make-our-skin-crawl.html>
- ³ プロジェクトは、公益財団法人日比科学技術振興財団令和4年度助成研究(一般)の一環として実施したものである。
- ⁴ 説明図作成：森真弓
- ⁵ 坂田直樹(さかた なおき)作曲家。愛知県立芸術大学卒業、パリ・エコール・ノルマル音楽院で高等ディプロマを取得、パリ国立高等音楽院(CNSMDP)作曲科第2課程修了、SACEM賞、第36回入野賞、武生作曲賞、2017年度武満徹作曲賞第1位、第66回尾高賞、第28回芥川作曲賞受賞。名古屋フィルハーモニー交響楽団第3代目コンポーザー・イン・レジデンス。「共鳴～Kyo-meい」クリエイティブ・アドバイザー。
- ⁶ 拍子木設計・制作：豊田昌久(愛知県立芸術大学木工室指導員)
- ⁷ パーカッション(打楽器)だけを用了合奏

執筆者

森 真弓 (美術学部メディア映像専攻 教授)
深町 浩司 (音楽学部器楽専攻管打楽器コース 教授)
佐藤 文子 (美術学部陶磁専攻 准教授)